

課題意識をもって歴史を追究する中学校社会科授業

—刈谷市歴史博物館との博学連携を通して—

野々目 将之（刈谷市立富士松中学校） 真島聖子（愛知教育大学）

Junior high school social studies class to pursue history with awareness of issues

-Through academic cooperation with the KARIYA City History Museum-

Masayuki NONOME ・ Kiyoko MAJIMA

1. はじめに

本研究の目的は、地域の歴史を展示する歴史博物館と連携し、生徒が自ら課題意識をもって歴史を追究する中学校社会科授業を構想、実践し、その成果と課題を示すものである。

中学校の社会科歴史的分野の目標の一つとして、平成 29 年告示の新学習指導要領では、歴史に関わる諸事象について「課題を主体的に追究、解決しようとする態度を養う」ことが挙げられている。その上で、「現在に伝わる文化遺産を尊重しようとすることの大切さについての自覚」を涵養していくように求めている。これは、新学習指導要領の目指す 3 つの資質・能力の中でも「学びに向かう力・人間性等」を育成することにつながっているとしている⁽¹⁾。これを受けて、「歴史との対話」の大項目では、「私たちと歴史」「身近な地域の歴史」の 2 つの中項目の学習を通して、「課題意識をもって歴史を追究し学ぶことの大切さに気付くことができるようにする」ことを求めている。特に「身近な地域の歴史」の中項目では、地域の歴史を取り扱っている博物館や郷土資料館の活用も考慮するように求められており、中学校と博物館との連携（以後：博学連携）を模索していく必要があることが分かる⁽²⁾。

「歴史との対話」の大項目では、歴史的分野の学習の導入として、生徒が、過去を継承しつつ、現在に生きる自身の視点から歴史に問いかけ、歴史的分野の学習を通して、主体的に調べ分かっていくとして課題を意欲的に追究する態度を養うことをねらいとしている⁽³⁾。生徒が現在に生きる自身の視点から歴史に問いかけるためには、問いかける歴史的事象が生徒の目の前に存在する必要がある、生徒の問いかけに答える存在も必要となる。「身近な地域の歴史」をたどることで、問いかける対象となる歴史的事象に出会うことが可能となり、地域の歴史博物館や郷土資料館を活用することで、生徒の問いかけに答えることができる学芸員に出会うことができる。交通手段・予算などの物理的な要因や時間的な要因もあり、博物館の利用は積極的に行われているとは言い難いが、博物館での学習が学習意欲を向上させることは、博学連携に関する多くの研究によってすでに明らかにされている。

そこで、本研究では、歴史博物館と連携し、生徒が自ら課題意識をもって地域の文化遺産について追究する授業を構想し、実践することにした。生徒が自らの課題意識をもって歴史を追究していく中で、問題解決の力や文化遺産への関心が高まり、博物館を活用することで学習が深まるのではないかと考えたからである。本研究では、この授業の分析を通して、生徒が自ら課題意識をもって歴史を追究する社会科授業の在り方を示していきたい。

2. 刈谷市の歴史博物館と授業プランの構想

(1) 刈谷市歴史博物館について

刈谷市歴史博物館（以下：歴博）は平成 31 年 3 月にオープンした。刈谷市の遺跡や遺物が

展示され、「刈谷の縄文時代」「刈谷藩と城下町」「刈谷発の近代化」の3つのテーマの常設コーナーと刈谷市の祭礼を取り上げた、「おまつり広場」がある。

オープンに合わせて、刈谷市では市内6中学校の見学事業をスタートし、中学校1年生全員を対象に、学校ごとに見学ができるようにした。見学時期は5～6月であり、歴史学習の導入時期～縄文時代の学習を進めている頃である。全国的に数が少ないと言われている中学校の見学事業が始まり、その活用方法を模索している段階である。歴博としては、主体的に見学に臨めるようなプログラムを開発しようとしている。

(2) 先行研究より

自ら課題意識をもち、それを追究していくためには、問題解決学習の手法を取り入れる必要がある。問題解決学習は「独自学習」と「相互学習」の二つの学習活動の過程を柱に構成され、その二つが連続しながら学習が展開されていくべきものである⁽⁴⁾。本研究の授業実践の際には、「相互学習」について、学級の仲間との学習に加えて、学芸員の話聞き取りことや学芸員への質問など、学芸員との双方向のやり取りも含むこととした。

宮下(2012)は博学連携の際の重要なポイントとして「生徒の身近にある地域史と全体史との共通点を発見することや相違点を見つけ出すことなどを通じて考察することで、歴史学習が身近になるような工夫が必要」と述べ、地域史と全体史との比較の必要性を指摘している⁽⁵⁾。初澤(2017)は「(博学の)連携を深めていくためには相互理解の深化が不可欠であり、共同研究なども含めて交流を進めていくことが必要」と述べ、お互いのニーズを満たす教育プログラム等を研究開発していく必要性を指摘している⁽⁶⁾。

これらのことを踏まえ、事前指導・見学プログラム・事後のまとめの3段階で単元を構想することにした。その際にそれぞれの授業場面で必要な手だてを資料1にまとめた。

資料1 歴博の見学を中核に据えた授業実践に必要な手だて

事前指導	見学プログラム	事後のまとめ
<ul style="list-style-type: none"> ・見学に向けての事前準備の必要性を、館長から生徒たちに伝える場面を設定する。(相) ・生徒が全体史と地域史とをつなげて考えられる場面を設定する。(相) ・見学を通して分かることと聞かなければ分からないことを考え共有する時間を設定する。(相) ・展示内容や「私たちの郷土」(副読本)、全体史の確認などを通して、それぞれの時代の刈谷がどのような様子だったのかについて目を向けさせ、博物館見学で明らかにしたい課題をもてるように支援する。(独) 	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の関心に合わせたグループ編成を行う。(独) ・生徒が聞きたいことを一覧表にまとめ、歴博の学芸員と共有する。(独) ・事前指導で生徒が考えた歴博で聞きたいことを、歴博の学芸員に質問できる時間を設定する。(相) 	<ul style="list-style-type: none"> ・歴博で学んだことを中心に、見学レポートを書く時間を設定する。(独) ・まとめの中で、歴博を見学した価値を考え、表現させることで、自己の成長を実感させる。(独)

*独自学習に関わる手だてには(独)、相互学習に関わる手だてには(相)を示す。

(3) 見学プログラムについて

歴博の展示内容に合わせて、4つのコースを設定した。コースの設定には、歴博の指導主事と相談した。それぞれのコースの概要について資料2に示す。

資料2 見学プログラムで設定した4つのコース

見学コース名	原始・古代 ～刈谷の遺跡～	近世 ～武士・刈谷城～	近代・現代 ～刈谷の発展～	祭礼 ～万燈・雨乞いに込められた願い～
内容	<ul style="list-style-type: none"> ①体験・講義「刈谷市の遺跡」 ②質疑応答 ③常設展示の見学(縄文を中心に) ④バックヤード見学 	<ul style="list-style-type: none"> ①講義「刈谷城について」 ②質疑応答 ③亀城公園(刈谷城址)散策・解説 ④常設展示の見学 	<ul style="list-style-type: none"> ①石田退三記念館の見学・解説 ②質疑応答 ③常設展示の見学・解説(近代を中心に) 	<ul style="list-style-type: none"> ①常設展示見学・解説・体験(お祭りひろばを中心に) ②講義「刈谷市の祭礼」 ③質疑応答 ④常設展示の見学

3. 授業の実際及び考察

(1) 単元構想

段階	単元構想（8時間完了）	学習課題	・予想される反応や発言	生徒の思いや思考	<教師の支援>	
事前指導	①歴史博物館ってどんなところだろう				歴博の館長からのビデオレターを視聴し、見学への意欲を高めさせる。	
	<ul style="list-style-type: none"> ・ARで刈谷城が見えるんだ。 ・万燈の体験もできるんだって。 ・依佐美の鉄塔の記念館にもよるんだって。ちょっと楽しみだな。 					
	歴史博物館の見学おもしろそうだな。ちょっと楽しみ。見学に向けて、刈谷の歴史について少し調べてみたい。					
	②歴史博物館の見学に向けて、小学校の歴史学習を振り返り、時代区分を確認しよう					小学校の歴史学習で学んだことを出し合わせ、時代ごとに分類することを通して、どの時代にどんな出来事があったのかを振り返らせる
③小学校の歴史学習で最も印象に残っていることと刈谷の歴史をリンクさせ、博物館で見たい展示品を探そう					わたしたちの郷土の目次を時代ごとに分類させることで、全体史と地域史とを結びつけて考えさせ、その時の刈谷はどんな時代だったのかに目を向けさせる 小学校の歴史学習で最も印象に残っていることを記述させ、仲間に伝えさせる。それにより、自身の関心のある時代を明確にさせる。	
	④それぞれの時代の刈谷ってどんな様子だったんだろうか。副読本や見学などで調べてみたい。					
	④それぞれの時代の刈谷はどんな様子だったのだろうかを博物館で調べるための課題を作ろう				展示内容や私たちの郷土、通史の確認などを通して、博物館見学で明らかにしたい課題をもたせる。	
	<ul style="list-style-type: none"> ・刈谷市にも縄文時代の遺跡があるということは、魚や貝を取って暮らしたり、貝塚があったりするのだろうか。 ・依佐美送信所のような戦争に関わる遺産もあるんだ。太平洋戦争では刈谷も大きな被害を受けたのか。 					
	歴史博物館で当時の刈谷の様子を聞いたり、調べたりしてみたい。学芸員さんに質問できるので、〇〇について聞いてみよう。					
見学プログラム	⑤⑥課題が明らかになるような見学にしよう				課題をもって博物館見学に行き、自ら質問をしたり、課題に沿って展示物の内容を見せたりする。	
	<ul style="list-style-type: none"> ・縄文時代に屈葬で埋葬された人骨や土器などが多数展示してあった。学芸員さんの話やバックヤード見学から土器の復元にはとても時間がかかることが分かった。 ・戦国の後期には刈谷は、刈谷城が作られ、水野氏が支配していた。今は公園になっているけれど、ちゃんとしたお城があったことが分かった。 					
	展示物の説明や学芸員さんのお話などで、刈谷の町にもたくさんの歴史の遺産があることがよく分かりました。疑問に思っていたことも聞けて、ちょっと刈谷の歴史に詳しくなれました。					
事後のまとめ	⑦⑧見学レポートを作ろう				見学レポートを書く活動を通して、どのような学びがあったか表現させる 見学レポートの中に学びの振り返りを記述させることで、地域史にも目を向けさせ地域への理解を深めるきっかけになったことを意識させる	
	<ul style="list-style-type: none"> ・全体史では江戸幕府ができ、武家諸法度ができ、刈谷では刈谷藩が作られ、ちゃんとお城もあった。水野家が治めていて、初代は水野勝成だった。同じ近世では、野田の雨乞いなども始まるなど、農民も苦労しながら生きていた。 					
	見学を通して、刈谷の歴史が少しだけ分かった。刈谷にも歴史があって、これから歴史の勉強をするときにその時の刈谷の様子も気にしたい。					

(2) 生徒Aについて

本研究では、生徒Aの記述や発言、行動を分析することで、単元の成果と課題を示す。生徒Aは社会科の調べ学習に丁寧に取り組むことができ、文章もきちんと書ける。物怖じしない性格で、発言も積極的にできる。授業を通して、自分が調べたいものを見つけ、学芸員に質問するなど、主体的な学習を期待している。

(3) 歴博の見学に興味を示す生徒A -第1時の分析より-

単元の導入として、歴博の見学に向けて、事前準備への意欲を高めることをねらい、歴博の館長からのビデオレターを視聴した。その中で、館長より「刈谷の歴史について調べてから見学に来てほしい」「学芸員から話を聞いたり、質問をしたりすることができるから、課題をもって見学に来てほしい」と2つの課題を与えられた。その上で、歴博の常設展示と見学プログラムの4つのコースについて、説明をした。

資料3 第1時の生徒Aの授業感想（6月5日 生徒Aの授業ノートより作成）

刈谷の歴史についてしっかりと学べるので、それまでにできるだけ勉強をして少しでも身に付けてから行きたいです。

資料3は第1時の生徒Aの授業感想である。「刈谷の歴史についてしっかりと学べる」と、歴博の見学を通して、郷土の歴史に触れられる機会に興味をもった生徒Aの様子うかがえる。その上で、「それまでにできるだけ勉強をして少しでも身に付けてから行きたい」と、館長からのビデオレターに生徒Aが素直に反応し、地域の歴史の学習に対し前向きに取り組もうとしていることが分かる。しかし、見学の際に何を見たいのかなど具体的な言葉は一つも見られない。これは生徒Aが歴博で見たいことも明確になっていないことに加え、見学プログラムの4コースについても十分に理解をできていないことを示していると考えられる。

このことから、歴博の館長からのビデオレターを視聴することで歴博見学に向けての課題を与えるという手法は、生徒が歴博を見学してみたいという、動機付けになっていることがうかがえるものの、その意欲は具体的ではなく、さらなる動機付けの必要性を示唆している。

(4) 郷土の歴史に引きつけられる生徒A -第2・3時の分析より-

生徒が4つの見学プログラムについて、それぞれどのような時代背景があるのかを明確に理解するためには、小学校の歴史学習の内容を振り返り、それぞれの時代を大観させる必要があると感じた。そこで、第2時では小学校で学習した内容をブレインストーミングで発表させ既習事項を共有した。その後、見学プログラムを選択する際に、生徒自身の関心がある時代を明確にするために、小学校の歴史学習で最も印象に残っている事柄について、短冊に書かせた。生徒Aは「卑弥呼」と書き、その理由を「神の声を聞けるなんてあり得ないけれども、すごいと思った」と書いた。卑弥呼を選択したことから、生徒Aは古代史について、関心がある事が分かった。そこで、第3時には、生徒の関心を地域史にまで広げていくことをねらい、生徒の印象に残っている事柄や全体史で活躍した人物の写真と4つの見学プログラムの中で学ぶことができる、刈谷市の文化遺産や偉人などについて概説しながら、写真を黒板に配置し、年表を作成した(資料4)。その上で、見学プログラムの希望調査を実施した。

資料4 第3時の板書写真(6月11日撮影)



資料5 第3時の生徒Aの授業感想(6月11日の生徒Aの授業ノートより作成)

見学希望コース：原始・古代～刈谷の遺跡～

私の家の近くで昔食器が作られていたなんて知らなかったの、驚きです。他にも刈谷市には芋川遺跡など、古代からのいろいろなものもあるのでもっと知りたいです。

資料5はその時の生徒Aのノートである(資料5)。生徒Aは「原始・古代」のコースを選択

した。その上で、「私の家の近くで昔食器が作られていたなんて知らなかったので、驚き」と刈谷市北部にある井ヶ谷古窯（猿投古窯群の一部）が自分の家からさほど遠くない距離に存在することを知らなかったAは、その事実に驚き、興味を引かれていることが伝わってくる。その上で、刈谷市北部にある遺跡の名前を具体的に挙げつつ、「もっと知りたい」と書いている。

「もっと」という表現からは、自分の知らなかった地域の歴史を詳しく調べ、どのような遺跡や遺物、偉人などがあるのか見つけていきたいという意気込みが感じられる。

これらのことから、小学校の歴史学習で最も印象に残っている事柄を選ばせることは、生徒自身の興味のある時代を明確にすることができる。その上で、全体史と地域史とをつなげて考えられる場面を設定することで、生徒が関心のある時代の地域の文化遺産に注目させることができ、生徒の追究意欲をかき立てることが分かる。しかし、それぞれの遺跡等の知識は浅く、その背景や歴史的価値を理解できていないことは明らかである。地域史の歴史について調べ、歴博で何を明らかにするべきなのかを考えさせなければ、歴博の見学で明らかにしたい課題を作ることはできないことが分かる。

（5）歴博で明らかにしたい課題をつくる生徒A -第4時の分析より-

前時の生徒Aの姿を受けて、地域史について学ぶ副読本「わたしたちの郷土」⁽⁷⁾（以後：副読本）を利用して調べる独自学習の時間を設定した。授業時間ではなく、朝の読書時間を活用することで効率よく学習に取り組めるように配慮した。生徒Aは関心のある古代だけではなく、幅広い時代の遺跡や偉人について、学習することができた。その中で生徒Aは、「野田の雨乞い」に関心をもつようになり、教師に見学プログラムのコースを「原始・古代」から「祭礼」に変更したいと申し出た。副読本を用いて、それぞれの遺跡等の内容や歴史的価値に触れたことで、生徒の興味に移り変わっていったと推測できる。そこで、第4時は学習課題を「それぞれの時代の刈谷の様子や人々の暮らしについて、見学で調べるための課題を作ろう」とし、歴博で何を見聞きしたいのかを明らかにする時間を設定した。授業の前半で、生徒が主体的な見学につながる課題を作れるようになることをねらい、見学の中で展示物や説明書きを見て分かることと学芸員に聞かなければ分からないことを考えさせる時間を設定した。その際に、刈谷城を事例にし、仲間の考えを全体で共有できるように配慮した。その時に生徒が考えた内容を資料6にまとめた。

資料6 生徒が考えた見て分かることと聞かなければ分からないこと

（6月13日の授業記録より作成）

展示物や説明書きを見て分かること	学芸員に聞かなければ分からないこと
<ul style="list-style-type: none"> ・城の周りにある物や立地 ・城の広さ、<u>大きさ</u>、高さなど ・人々の暮らし 	<ul style="list-style-type: none"> ・城の<u>構造や工夫</u> ・土地の形 ・外見からは分からない、城の中の工夫 ・刈谷城を作るのに何人の人が関わったのか ・<u>なぜ天守閣がないのか。</u> ・何人の人が暮らしていて、<u>どんな役割があったのか</u>

生徒たちは刈谷城の展示は大きなジオラマになっているため、見て分かることとして「城の構造や工夫」、「大きさ」など外見から分かることを挙げた。それに対し、「なぜ天守閣がないのか」「どんな役割があったのか」など、他の地域との比較や、その理由、人々の暮らしぶりや役割のような細かな点は学芸員に聞かなければ分からない可能性があると言った。これにより、生徒たちは、聞かなければ分からないこととはどのような質問なのかを共有した。その後、副読本や歴博のパンフレットを用いて、生徒が歴博見学で明らかにしたい課題を考える独自学習の時間を設定した。

資料7 生徒Aの独自学習の内容と、学芸員に聞いてみたいこと

(6月13日の生徒Aの授業ノートより作成)

独自学習の内容	学芸員に聞いてみたいこと
<p>○野田八幡宮 676年に建てられたと伝えられている。 八幡大神(応神天皇)(略)を祀っている。 刈谷市内で1番位が高い。 江戸時代から信仰があつた。水野勝成の「総髪兜」などが代々祀られていて、守られている。</p> <p>○雨乞い笠おどり 貧しい農民たちの願いが込められている。 ほら貝、つづろ、太鼓、笠おどりに使う棒</p>	<p>○だれが、なぜ雨乞い笠おどりははじめたのか。</p> <p>○なぜつづろでたたくのか *つづろ：祭礼で使用する太鼓をたたくためのバチの名前。和太鼓用のバチとはことなり、拍子木のような形をしているのが特徴。</p> <p>○なぜ笠をかぶるのか</p>

生徒Aは見学プログラムの中から「祭礼」を選択した。独自学習の中で副読本を使って「野田八幡宮」⁽⁸⁾と「雨乞い笠おどり」⁽⁹⁾について調べ、分かったことをまとめることができた。その上で、学芸員に聞いてみたいことを3つ書いた(資料7)。「だれが、なぜ雨乞い笠おどりははじめたのか」と雨乞い笠おどりの起源について気になっている生徒Aの様子うかがえる。さらに、「つづろ」「笠」と雨乞い笠おどりで使用される独特な道具について関心をもった。雨乞いの起源やこれらの道具がどのような意味をもつのかについては、副読本には紹介されておらず、学芸員に聞かなければ分からない可能性のある質問である。これは授業の前半で、学芸員に聞かなければ分からないことを学級全体で考え、共有した手だてが有効に作用したと考えられる。また、副読本などを通して独自学習に取り組ませたことで、すでに分かっていることと、まだ分かっていないことを意識でき、見学を通して聞きたいことや学びたいことが明確になったと考えられる。

(6) 見学の中で学芸員に質問し、自らの課題を解決する生徒A -第5・6時の分析より-

生徒Aは祭礼のプログラムに参加した(資料2参照)。資料8はその際の見学メモの中から、生徒Aが関心をもっていた雨乞い笠おどりに関わる部分を抜粋したものである。

資料8 見学メモ(6月14日の生徒Aの授業ノートより作成)

<p><雨乞い笠おどり> 8月下旬に行われる。ふつうのバチは36cmだけど、<u>つづろは16cmで、太さは倍</u> 衣装…一文字笠・浴衣・赤だすき 指定…刈谷市指定無形民俗文化財 道具…ほら貝・桶同太鼓・つづろ・采配 昭和17年に途絶える → <u>昭和54年ごろに復活</u> (以前に) <u>やっていた人が生きているから</u> (復活できた) ! ○質問 Q <u>なぜ雨乞いはその衣装なのか?</u> A 当時の人の服 … <u>いいものが着られなかった</u> → <u>浴衣を着る</u>。笠も農作業の時に使っていた。<u>つまり、普段の服ということ!</u></p>

「つづろは16cmで、太さは倍」や「昭和54年ごろに復活…やっていた人が生きているから」と見学のメモを残していることから、聞きたかった内容に沿って見学を進めていることが分かる(資料8参照)。衣装や道具についても記入していることから、学芸員の説明や展示内容を書き写しているのではなく、生徒Aがもつ課題を明らかにするために情報を取捨選択している生徒Aの様子うかがえる。さらに、学芸員に「なぜ雨乞いはその衣装なのか」と質問をしている。事前に聞きたいと考えていた笠のことだけではなく、学芸員から衣装についての説明を受けて、その衣装を着ている理由について新たな関心をもち、質問したことが分かる。「いいものが着られなかった→浴衣」「つまり、普段の服ということ!」と学芸員から聞き取った内容をまとめた。前時の独自学習で捉えた江戸時代のまずしい農民の姿とつなげて考えている

ことが分かる（資料 8 参照）。特に「つまり」という言葉には、生徒 A が学芸員の解説に納得をした様子が伝わってくる。これらの姿は生徒 A が主体的に見学に臨み、自らの課題を解決した姿であり、前時までの 4 時間に講じてきた手だてや学芸員への質疑応答の時間を設定したことが有効に作用した結果だと考えられる。

（7）課題を解決し、学びに満足感を得る生徒 A -第 7・8 時の分析より-

単元の終末に見学内容をレポートにまとめる時間を設定した。書く内容は、事前指導や見学プログラムを通して学んだことや考えたことをまとめるのと同時に、この単元の学習を通して得られた自分自身の成長にも言及するように指示を出した。これにより、自分たちが住む身近な地域の文化財に愛着を感じ、歴史を学ぶことのよさを実感する姿が表出すると考えた。

資料 9 見学レポート（6 月 19 日生徒 A の授業ノートより作成）

私は今回、お祭りについて調べたり、お話を聞いたりしたけど、こういう授業を通して、刈谷のいろんなところが知れて、この見学で大切さを実感しました。刈谷市だからこそのお祭りや、古代のいろいろな遺跡、近世、近代の発展が詳しく歴史博物館に行ったからこその習得（学び）だと思うので、本当に行けてよかったです。

資料 9 は見学レポートの自分自身の成長に関わる部分を抜粋したものである。生徒 A は「お祭りについて調べたり、お話を聞いたりした」と単元を振り返り、「刈谷のいろんなところが知れて…大切さを実感」できたと書いた。4 時間の事前指導を通して見学で聞きたいことを明らかにした上で、見学プログラムを行ったことで、生徒 A のもっていた課題が解決され刈谷市の祭礼に対する知識が深まったことが分かる。そして、「大切さを実感」と、雨乞い笠おどりはじめ、見学プログラムを通して学んだ刈谷市の祭礼が、当時に生きる人々の生活に根ざしたものだと知り、その歴史的価値を実感したと推測できる。これは、生徒 A が郷土の歴史に愛着を感じ、誇りをもっている姿だといえよう。

その上で、「刈谷市だからこそ…歴史博物館に行ったからこその習得（学び）」と歴史博物館に行ったことにより、生徒 A 自身の課題が解決され、深く学べたことを実感している様子が読み取れる。特に「こそ」からは課題の解決に、歴博の見学が欠かせないものであったという実感が込められており、その上で「本当に行けてよかったです」と書いたことから、課題を解決できたことに対する満足感を得ている様子が伝わってくる。

このことから、学んだことを見学レポートにまとめることで、生徒が自分の課題に対する答えを明確にすることができ、地域の文化遺産を大切にしたい気持ちが育まれることが分かる。また、課題を解決できた成功体験が、生徒の学びに対する満足感が高まることにつながり、問題解決の力として蓄積されていくと考えられる。

4. 終わりに

本稿で示した単元は事前指導・見学プログラム・事後のまとめの 3 段階で単元を構想し、問題解決的な学習を取り入れた。その中で、歴博で学芸員に聞かなければ分からない課題を考えさせた。生徒の課題解決を支えられるように、歴史博物館に生徒の聞きたいことを事前に伝え、見学プログラムの中に質疑応答の時間を設定するなどの連携を行った。

新学習指導要領の完全実施を見据え、これから博学連携の必要性が増していく状況にあって執筆を行った本稿の成果と課題は次の通りである。

（1）成果

第1に、博学連携をする中で、事前指導・見学プログラム・見学のまとめの3段階で単元を構想し、問題解決的な学習を取り入れる手だては、文化遺産を尊重しようとする態度を育むのに有効であったことを明らかにした。問題解決的な学習を取り入れた生徒Aの姿からは、地域の文化遺産である祭礼に関心を持ち、それについて調べたり、見学を通して学んだりする中で、文化遺産が大切なものであると実感することができた。このような学習経験が積み重なることで学習指導要領が求めている、「現在に伝わる文化遺産を尊重しようとすることの大切さについての自覚」を涵養することにつながっていくと考えられる。

第2に、学芸員に聞きたいことを聞ける時間の設定は主体的な見学を可能にし、生徒の問題解決の力を育むのに有効であったことを明らかにした。本稿で示した実践にとっては、歴博との連携は欠かせないものだった。特に学芸員への質疑応答の時間を設定したことは、生徒が主体的に課題解決をするのに有効だった。特に、見学と説明だけでは解決しきれなかった課題を聞くことができる時間が確保されていることで、生徒の見学が主体的となり、課題を解決できる成功体験につながった。このような授業を続けていくことで、課題意識をもって歴史を追究し学ぶことの大切さに気付くことができ、生徒の問題解決の力が育まれていくと考える。

これらのことは、生徒が課題意識をもって見学に臨み、学芸員に質問ができる時間が確保される問題解決的な学習により、歴史を学ぶ意義を見いだす社会科の授業になり得ることを示唆している。

(2) 課題

歴史博物館との連携には時間がかかる。これを授業時間外に行うことになるため、労力もかかる。この時間と労力を生み出す工夫については本稿では触れられなかった。また、歴博側の授業に対する理解や相談のしやすさも影響してくる。本稿に掲載した授業実践では歴博の指導主事がコーディネーターの役割を果たした。博物館や学芸員と授業者とを結ぶ、人材の確保は必要である。このようなコーディネーターに求められる役割についても本稿では触れていない。多くの事例研究を進める中で、博学連携のパターンを類型化し、コーディネーターに求められる役割を見いだしていきたい。

【注】

(1) 文部科学省(2017)『中学校学習指導要領解説 社会編』pp. 86

(2) 同上 p. 91

(3) 同上 p. 90。

(4) 藤井千春『子どもが蘇る問題解決学習の授業原理』明治図書 p. 86

(5) 宮下貴光「中学校社会科歴史的分野における博物館との連携に基づく授業開発」
<http://hdl.handle.net/10132/7172>, 2012, pp. 1-2

(6) 初澤敏生「北海道・東北地方における地域博物館と学校との連携活動に関する調査報告」
『福島大学地域創造』第28巻第2号, 2017, pp. 100-106

(7) 『わたしたちの郷土～刈谷歴史伝～』刈谷市教育委員会, 2018

(8) 野田八幡宮：刈谷市野田町にある神社。江戸時代から続く雨乞い笠おどりが毎年奉納されていることで有名。

(9) 雨乞い笠おどり：刈谷市無形民俗文化財に指定されている祭礼。江戸時代に始まり、現在は野田雨乞笠おどり保存会によって、毎年奉納されている。